プロセスカットの時代に必要な教育

世古　真一

ロケット博士と言われ、日本の宇宙開発のパイオニアであり、医療機器の分野では日本初の脳波測定器を作った糸川英夫博士。音響工学の分野では名器ストラディバリウスに負けないバイオリンを製作し、小惑星探査機「はやぶさ」がサンプルリターンを行った小惑星は博士にちなんで「イトカワ」と命名された。

博士は、人類の未来、日本の将来に深い憂慮を抱く一方、若い世代の活躍に大きな期待を寄せながら1999年2月21日に亡くなった。

生前、1990年代初め、私は糸川博士が主催する勉強会に通っていたが、「これからの時代はプロセスカットが加速していく時代になる」と話していたことが印象に残っている。

簡単に言うと、人間の生活における行動のプロセスが商品に変わっていってしまうということだ。例えば、歩くという移動手段が自動車になり、食事を作るというプロセスが外食や加工食品やサービスという商品になっていくということだ。それが様々な産業の、あらゆる分野で起こっていくということを話していた。

カットされたプロセスは商品化され、カネで買えるようになり、生活は便利になる一方、若い人にとっては全てが用意されていて面白みがなく、カネにとって代わられ、拝金主義になり、行動のプロセスがイメージでき、行動を起こせず引きこもりがちになる人が増えてることが予想され、諸刃の剣になると語っていた。そんな、30年以上前の話が現実になっていて、そんな状況を克服しようとしている学校に巡りあえた。

2月中旬、二科展に入選した誠恵高芸術コースの陶芸作品の展示がサントムーン柿田川のオアシスコートで行われると知ったので見てきた。大型の作品が多かったので聞いてみると、高校としては珍しい大型の作品も焼ける窯を導入しているとのこと。

コーヒープロジェクトという取り組みもあり、コーヒー豆の焙煎機を導入して焙煎した豆を生徒が、こだわりながら淹れてくれた。そのコーヒーは学校の図書館でも飲めるとのこと。会場で理事長と校長に会い、ご縁ができたこともあり誠恵高に見学に行ってきた。

最初に通されたのが「天空の図書館」。北館の5階にあり、窓いっぱいに広がる愛鷹山と富士山の景色を眺めながら本を読める空間だ。

そして、コーヒーの香りとホビーを中心とした雑誌や書籍がきれいに並べてある。高校の図書館とは思えない空間で、代官山の蔦屋書店が沼津に出現したようだった。昼時になると、弁当を持って生徒達が図書館に食べに来ている。

その日は卒業式の前日でもあり、先生へのお礼の品を図書館にいる先生に手渡しに来ていた生徒もいた。

昼食のカレーには何種類ものスパイスをブレンダーで調合したものを用意していただいた。焙煎機で生のコーヒー豆から焙煎するプロセスを見せていただいた。それを理事長はじめ先生達が楽しみながらやっているのだ。

大人が楽しみながらやっている姿を子どもたちが見れば興味が湧いて、自分でも工夫しながら取り組みたくなることが想像できる。だから二科展入賞という偉業を達成するのだ。最近はやりのeスポーツで全国大会で入賞した生徒さんにも会えたが、皆、自信を持って話していた。

成熟している商品経済社会において、商品化されたプロセスをあえて分解して大人達が率先し、面白がって、そのプロセスを体験する姿を子ども達に見せるという、新しい校風の高校が沼津にあることを知り未来に期待が持てた。

しかし、校長先生曰く、現在の校風を知らずに、一部の人達が持っている昔のイメージが現在も続いていると思われている過去の評判の払拭が課題とのこと。

プロセスカットにより混迷している社会において、行動のプロセスを知り成果を積み上げることができる生徒が輩出していくことで、誠恵高が全国から注目される日は、そう遠くない予感がした。

（平町）